親のしつけに感謝

～我が家の防災教育はとてもシンプル～

（宮古市 60代 女性 元校長）

私たち６人姉弟は、地震が起こるといつも、「地震だ、逃げろ！それー」って、ランドセルを背負って近くの山に逃げました。ランドセルが空っぽだからと教科書をとりに行こうとすると、「絶対に戻るな！」と言われました。

夜は公民館へ逃げました。真っ暗でも着られるように服をたたんで順に枕元に置いて寝ること、すぐに外へ出られるように玄関の靴を揃えておくことが我が家の決まりでした。

東日本大震災の日も、迷わず逃げることを選びました。地震が起きたのは５時間目の授業中。校舎がメキメキと揺れる中、生徒を集め、一枚ジャケットを羽おらせ、中学生には小学生を手伝わせて避難しました。

私の両親は昭和三陸津波で家族を失っています。それだけに、子どもたちに津波の恐ろしさを徹底して教えてくれたのだと思います。とてもシンプルな分かりやすい防災教育でした。

できる人がやるしかない

～津波の合間に必死の救助～

（釜石仮設団地 60代 男性）

テレビでよく映像が流れますが、映像で見る震災の状況と、実際に肌で感じる臭いであったり、風であったり、音であったりというものとは、全然違うわけですよね。泣き叫んでしゃがんで立てない人もいたけれど、みんな自分がどうするかが先決で、それをかまってやれない状況でした。

人が流されているのを上から見て、「電柱なり、ポールなりにとにかく捕まれ！離すな！離すな！」と言っておいて、波が引いて行った時に降りて行きました。いつまた津波が来るか分かんないから、こっちは早く助けに行こうとあせるけど、膝の高さまで水があったら身体をもっていかれちゃう。やっとたどり着いても、物にすがっている人は、手を離せと言っても硬直しちゃって離せない。もう水を含んでいるから重いでしょ、二人ぐらいで抱き上げて助けました。

次に大きな波が来た時、さっき人を助けていた時に来ていたらどうなったんだろうと思ったけど、その波が引くと、だまって見ていられないんです。感謝もなにもあの時はそれが当たり前でしたし、足がすくんで助けに行けない人が悪いんじゃないんです。できる人がやるしかない、誰を恨むじゃなしにね。

自分たちはこの震災で全てをなくしてしまって、ゼロどころか、マイナスからのスタートになっちゃった。じゃ、その気持ちをどこにぶつけるかといっても、ぶつける場所がないんですよね。自然しかないんです。あとは自分たちがこれからどうしようと考えるしかないんです。

「危ないから行かないで」と母に止められる

～３日後に父と再会、「てんでんこ」の意味実感

（釜石市 震災当時小学４年 男子）

授業を受けている途中に地震が来て、いつも避難訓練でやっているように机の下にもぐり、揺れがおさまるのを待ちました。

それから、先生に「避難するぞ！」って言われて、避難場所となっていた近くの高校へ避難しました。

後から母さんが来たけど、「父さんはまだ来ていない」と言われました。ぼくは父さんや家がどうなっているのか気になって、津波を見に行こうとしたけど、母さんに「あぶないから行かないで！」って言われてやめました。

その日は体育館の暗幕を床に敷いて、その上に毛布を敷いて寝ることになりましたが、ぼくは父さんとの連絡がとれずにいたので、あまり良く眠れませんでした。

やっと３日後に父さんが避難場所に来ました。家族がバラバラに避難してきて、なんて言うか、よく教わっていた「津波てんでんこ」だったなと思います。

旧村の地域に呼びかけボランティア

～高齢者多く無理せず半日作業も～

（宇治市 80代 男性 地区役員）

被災後、自治会で救援ボランティア活動をしました。「被害にあってないところで元気な人は全員出てください」と呼びかけたら、たまたまお盆休みだったこともあり、若い人がずいぶん来てくれて、延べ371人の自治会員が復旧作業に取り組んでくれました。

もともとこの地域は旧村ですから、80になっても90になっても、何々ちゃん、何々ちゃんの関係なんです。「何々ちゃんとこ今大変だから、行こう」と、ダーッと行くといった具合。ただ、高齢者が多いため、午後はもう体が続かないということで、だんだんと午前中だけの作業に変えていきました。

半分いなかですからみんな家にスコップがあり、クワもあり、一輪車もあります。それらを全部持ってきてもらい、泥水や床下の土砂の排出とか畳や家財道具の処理などをしてもらいました。

泥んこになって床下の土砂をかき出す住民のみなさんの姿を見て、地域が一心同体になったと確信でき、涙が出るほどありがたかったです。

泥水かぶった道に水を流して清掃

～心強い地域の助け合い～

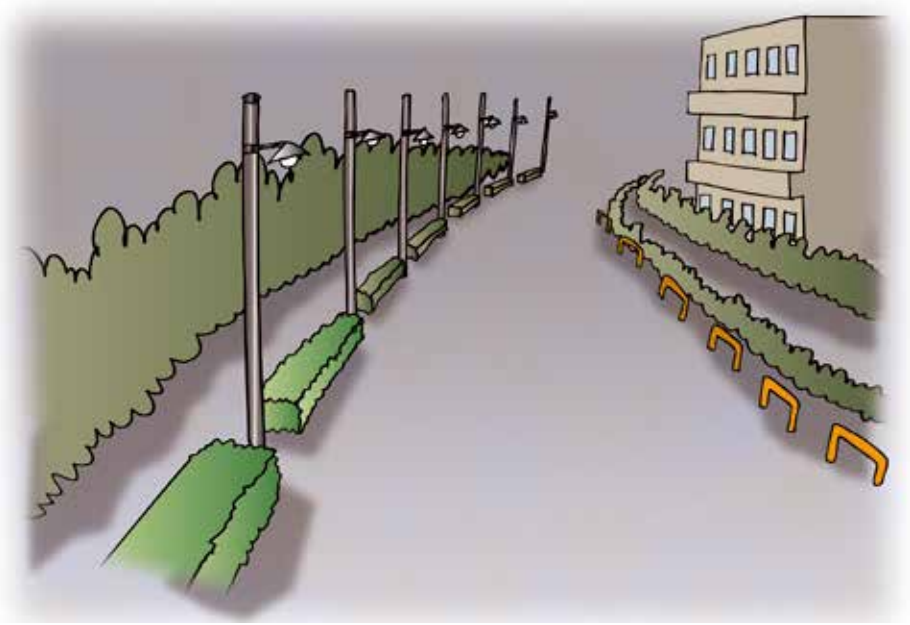
（宇治市 60代 男性 地区役員）

私が異常に気づいたのは午前４時半くらい。ものすごい雨音で目が覚めて、パソコンで気象庁のレーダー画像を見たら、それこそ強い雨、１時間に50ミリを超すような雨雲が次々とやってきていて、「これは危ないな」と思っていました。

気がつくと、近くの川の水面が上がっているのが見えましたので、すぐにマンションの管理人さんなど何人かに「あと50センチくらいであふれるで」と電話しました。

案の定、５時過ぎから急激に水位が上がり、気がついた時には水が道路にあふれている状況になりました。住民のみなさんに道路があふれていることを知らせたのはこの後。もうちょっと早めに注意をうながすことができれば良かったのですが、あふれそうだという予感はしていても、どの程度あふれるかは予想がつきませんでした。ちょっと気が動転していたせいもあるかもしれません。

幸い大きな被害にはなりませんでしたが、かなりの人が自分から掃除を買って出て、泥水をかぶった道路に水を流してくれましたので、前よりもきれいになったくらいでした。何かあった時のこのような助け合う力をとても心強く感じました。



一日前プロジェクト みんなでやってみよう！

－簡単な手順を紹介します－

まず、過去の自然災害（地震、水害等）の中から対象を選ぶ

↓

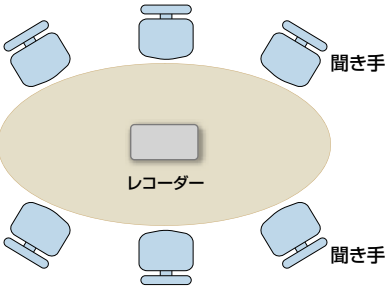
その災害の被災経験者や災害対応経験者に声をかける

↓

みんなが集う場所と時間を設定する ※所用時間は約2時間

↓

なごやかな雰囲気の中で、当時を思い出しながら、
体験したり感じたことを話し合ってもらう ※話し手は、2人～4人が適当



「教訓」や「知恵」につながる部分を拾い出し、タイトルをつける

↓

テープ起しなどを基に、拾い出した部分を「物語」にする
※物語は、300字～500字程度で、できるだけ語り口を残して編集
※物語の情景を表すイラストや写真等を添えると効果的

↓

作成した「物語」を地域や職場のみんなに読んでもらう

気づき　共 感　反 省